

フリーダ・ヴェッチの「厄介な立場」

—『ポイントンの収集品』考—

The Spoils of Poynton: Fleda Vetch's Awkward Position

内山 鉄二郎*

目 次

- はじめに
1 「相続争い」と「厄介な立場」
2 「厄介な立場」と「仲介者」
3 「仲介者」の「倫理的誠実さ」
4 美術「品」と「美術」品
おわりに

はじめに

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) の小説『ポイントンの収集品』(*The Spoils of Poynton*, 1897)¹は、他のジェイムズの小説と同様に、これまでさまざまな読み方が行われて来た。それらの読み方について、早いところではオスカー・カーギル (Oscar Cargill)²、最近ではデイヴィッド・ロッジ (David Lodge)³、ジーン・フランツ・ブラッコール (Jean Frantz Blackall)⁴などが簡潔に紹介・論評を行っている。

それらの読み方において、読み方を左右する二つの問題点が共通して指摘されている。それらはまた、読み方の核心的な問題点でもある。一つはフリーダ・ヴェッチ (Fleda Vetch) は中心人物兼語り手として、果して信用できる人物であるか、もう一つは最終場面でポイントンの「収集品」は、何故焼失しなければならなかったかという二点である。前者については、ロッジのまとめによれば⁵、批評家たちはフリーダが中心人物兼語り手として信用できるとするグループと、できないとするグループの二つに分かれる。後者については、ブラッコールの要約によれば⁶、最終場面でのポイントンの「収集品」の焼失について批評家たちの間に解釈は分かれるが、「劇的効果がある」という点については異論はない。

本稿では、それらの読み方を検討しつつも、それらの読み方を網羅するのが目的ではないので、必要に応じてその一端を紹介したり、見解の相違を明らかにする程度に留め、筆者の

*UCHIYAMA, Tetsujiro [情報文化学科]

「もう一つの読み方」を試みることにしたい。なお、前者については、筆者はフリーダが中心人物兼語り手として信用できるとするグループに属する。しかし、彼女が信用できるか、できないかを決定する以前に、彼女はどのような人物たちに囲まれ、どのような「立場」に立たされていたかを、さらに注意深く考察する必要があることを強調したい。後者については、ポイントンの「収集品」の焼失場面の「劇的効果」については筆者も異論はない。しかし、前者において強調した視点から、その場面をそのようなものになっている事情について再検討を試みたい。

従って、本稿ではフリーダが立たされた「立場」をとりわけ重視し、それはいかなる「立場」であったか、それが意味するところのものは何かを探りながら、『ポイントンの収集品』の「もう一つの読み方」をまとめてみたい。

1 「相続争い」と「厄介な立場」

『ポイントンの収集品』において、フリーダの「立場」は「厄介な立場」であった。その「立場」は、彼女が現れる以前にすでに「厄介な」ものになっていた。そして、彼女がかかわった後も、しばしば彼女の意向に関係なく、あるいは無視する形で、「厄介な」ものであり続けた。それにもかかわらず、彼女は彼女の「立場」を放棄することなく、それを「倫理的誠実さ」を持って首尾一貫したものにしようと努力した。そのような「倫理的誠実さ」が、他ならぬ彼女の「厄介な立場」が意味するところのものであった。

フリーダがかかわる以前にすでに出来上がっていた「厄介な立場」は、ゲレス家の人たち、つまりゲレス夫人 (Mrs. Gereth) と彼女の息子オーエン・ゲレス (Owen Gereth) との間の、ポイントンの「収集品」の相続をめぐる「相続争い」であった。

ポイントンの「収集品」とは、ゲレス家のポイントン邸に収集されている「完全無欠な芸術作品」(Ⅱ) のことである。それらは、いずれもフランスやイタリアの究極の美を象徴していた。さらに、それらを取めるポイントン邸そのものが「非の打ちどころのない、初期ジャコビアン様式の古雅な屋敷」であり、その上ゆったりと屋敷を抱擁している風景もまた、屋敷と渾然一体となって、イギリス風景美の真髄を示していた。

この収集を限られた資金で実現した人物が、ゲレス夫人である。彼女は何よりも彼女自身の「天賦の才と情熱と、収集家としての忍耐力」(Ⅱ) によって、「ヨーロッパの隅々に至る

まで」駆けずり回って、「二十六年間にも及ぶ計画と探索」の結果、そのような収穫をなし逃げた。まさに「どんな手練の狩人にもひけをとらない」美術品収集家であった。

彼女にこのような収穫を可能にさせたのは、夫ゲレス氏の「共感と寛容、知識と愛情」(Ⅱ)であった。ところが、二年前に彼を失い、遺産相続ということになって、「寡婦から一切を剥奪する英国の酷薄な習慣」を知り、彼女は愕然とした。その「習慣」に従って、亡き夫は「屋敷とその中味」を息子にそっくり渡し、彼女には「食い扶持」と「隠居小屋」を保証しただけであった。「家宝の品々への妻の関係や、それらのために、待ち、努め、選び、取り合わせ、しつらえ、夫と自分とそして家に恥じぬものとして、見守り、いとしみ、血肉を通わせて生きてきたその情熱に対しては、これっばかりの配慮もなされていなかった」。しかし、「どうやら彼は、そんなことは彼女が息子と話をつければいい、オーエンの愛情、オーエンの公平さに俟てばいい、と考えていたらしい」と、彼女は納得しようとした。とは言え、オーエンがどこかの「とんでもない女」(Ⅰ)と結婚をし、夫が期待していたようには、ことはうまく運ばないかも知れないという不安に、心中穏やかではなかった。

オーエンはモナ・ブリグストック (Mona Brigstock) という若い女と親しくなり、婚約をした。彼女こそ、ゲレス夫人にとって「とんでもない女」(Ⅰ)、「無知で俗悪な女」(Ⅲ)であることが分かった。と言うのは、「美意識」を持っているかいないかという一点からしか、人間を評価しないゲレス夫人は、ウォーターバス (Waterbath) のブリグストック家を訪問した時、「先天的に彼ら一族から美的趣味の原理が無慚に欠落している」(Ⅰ) ことを確信したからである。

彼女の不安は的中した。モナはポイントン邸とその「収集品」を美術品として評価はできなかったが、高価な財産であることは分かった。そして、「収集品」は「家に付いている」(Ⅱ) ものとして、ポイントン邸とその「収集品」をまとめてゲレス氏からの遺産として、オーエン (そして、彼女) が引き継ぐことを、オーエンとの結婚の条件にした。

「とんでもない女」(Ⅰ)、「無知で俗悪な女」(Ⅲ) と婚約をして憚らないオーエンを、ゲレス夫人は当然のことながら「微塵の心遣いも、いたわりも、やさしさも、持ち合わせていない」(Ⅴ) 親不孝息子と決めつけたが、オーエンはオーエンで、ポイントンの「収集品」は「僕のものになるようにと父が万遺漏なく処置してくれてたんですからね」(Ⅳ) と反発を強めるだけであった。

ゲレス氏がまだ生きていた頃は「収集品」は幸運なことに「美術品」と「財産」を一体化

していた。彼が亡くなって、それが相続される「遺産」に変わったとたんに、不運なことに「美術品」と「財産」の二つに分裂してしまった。「美意識」の豊かなゲレス夫人は「英国の酷薄な習慣」(Ⅱ)を「不条理」、「非道」として、「美術品」としてその所有権を主張し、「美意識」が欠落しているオーエンとモナは同じ「習慣」、つまり遺産相続法に基づいて、ゲレス夫人の主張を違法なものとして、「財産」としてその所有権を主張した。両者の主張はまったく相反し、すれ違った。

このような「相続争い」に、フリーダが心ならずもかかわった時、彼女の「厄介な立場」が始まった。

2 「厄介な立場」と「仲介者」

フリーダはゲレス家とはまったく関係がない若い女であった。たまたまウォーターバスのブリグストック家を訪問していた時(ブリグストック家との関係はつまびらかにされていないが、何かの手蔓でそのような富裕な家に招かれていたのであろう)、モナの家の様子を探りに来ていたゲレス夫人と偶然出会い、ゲレス家とかかわるようになった。その瞬間が彼女の「厄介な立場」の出発点であった。その「立場」を「厄介な立場1」「厄介な立場2」「厄介な立場3」「厄介な立場4」に分けて検討してみたい。

「厄介な立場1」

ゲレス夫人は、「人並みすぐれた勸」(Ⅱ)、つまり鋭い「美意識」をフリーダが持っていることを知り、即座に彼女が好きになった。他方、フリーダは「人生の荒波に立ち向かう武器を身につけようと」、「バリのとあるアトリエで一年間を印象派の画家の下で修行を積んだ」が、そんな経験がどの程度世間に通用するものかどうか、彼女には自信がなかった。そうであってみれば、たぐい稀な(と、彼女には思われた)美術品収集家であり、しかも彼女より富裕な階層に属するゲレス夫人に評価され、友人にされたことに、「半ば狂喜にうち震える思い」と「半ば恐ろしさにおののく思い」を感じた。

このようにして、ゲレス夫人によってフリーダは心ならずも「収集品」の「相続争い」の「仲介者」にされた。その時、彼女が考えた「仲介者」の仕事は、ゲレス夫人とオーエンの言い分にそれぞれ耳を傾け、両者の妥協点を探ることであった。たまたま彼女はゲレス夫人に

対しては言うまでもなく、オーエンに対しても公平に聞く耳を持っていると自認していたので、「相続争い」の解決は不可能ではないと考えた。

彼女が予想した妥協点とは、ポイントンの「収集品」の中の一部の、とりわけ貴重な「美術品」をゲレス夫人、その他のすべての「財産」をオーエン（そして、モナ）に帰属させることであった。しかし、ゲレス夫人にとってとりわけ貴重な「美術品」は、一部ではなくて全部であったし、オーエン（とりわけ、モナ）にとって相続する「財産」はその他のすべてではなくて、文字通りすべてでなければならないことが分かった。

となると、フリーダは「仲介者」として「相続争い」を解決するために何もすることができないか、さもなければオーエンに任せて、法的手段を借りて、ゲレス夫人にすべての「収集品」を放棄させることしかなかった。しかし、ゲレス夫人の「仲介者」としてこのようなことをさせることは、フリーダにとって堪えられないことであった。

もともと、ゲレス夫人は「英国の酷薄な習慣」(Ⅱ)を拠り所にして、オーエン（とりわけ、モナ）が取ろうとしている法的手段に対して徹底的に抗戦し、争いを明るみに出し、ゲレス家の恥を世間に晒すことになっても意に介さなかった。恥をかくのは彼女ではなく、オーエンとモナであったからである。

そのような覚悟を固めたのか、突然ゲレス夫人はフリーダに何の連絡もなく、「収集品」の「何もかもと言うのが言い過ぎなら」「屋敷の半分がた」(Ⅷ)をポイントンからリックス(Ricks)、つまりゲレス夫人に与えられた「隠居小屋」(Ⅱ)へそっくり移動した。その行動は予期されたようにモナを怒らせ、彼女に「正真正銘の詐欺」と言わせ、オーエンとフリーダを啞然とさせ、「相続争い」の解決を決定的に不可能にした。

このような解決不可能な「相続争い」の「仲介者」の「立場」が、フリーダが立たされた「厄介な立場1」であった。それにしても、彼女の「立場」を「厄介な」ものにしたのは、この場合どこまでも彼女自身ではなく、彼女を取り巻くゲレス夫人、オーエン、モナたちであった。

「厄介な立場2」

ゲレス夫人はこのような行動と平行して、もう一つの行動を考え、実現させようと目論んでいた。実は、ゲレス夫人がフリーダを友人として選んだ理由には、彼女をオーエンと結婚させ、できることなら「無知で俗悪な女」(Ⅲ)から「収集品」を救い出したいというしたた

かな計算があった。そして、そのことをゲレス夫人はフリーダに隠さなかった。

「あなただったら、きっとそうしてくれるわ... わたしとそっくり同じようにあなたは知っていらっしやる、感じていらっしやるのだから、... あなたならわたしの代わりに勤まります。あなただったら、あれら（ポイントンの「収集品」）の面倒を見てくださる... あなたが居て下されば、わたしは心を安んじてお墓に入ることも出来ます！」(Ⅲ)

これを聞いて、フリーダは感激の余り、「わっと泣き崩れてしまった」(Ⅲ)。彼女もポイントンの「収集品」に魅惑されていたし、それがいかに価値ある美術品であるかということを理解していたからである。

それでいて、彼女はゲレス夫人によって「オーエンにふさわしい花嫁候補として押し出してもらったことを少しも喜ばなかった」(Ⅳ)。と言うのは、ゲレス夫人があらゆる問題をポイントンの「収集品」との関係でしか考えることができなかったこと、そのために他者に対する人間的な配慮を完全に欠落してしまっていることを、彼女はすでに見抜いていたからである。どういう言い回しであれ、ゲレス夫人は「収集品」の維持・保存のために、フリーダを収集した美術品の一つ、つまり独立した意思を持った「人間」ではなく、彼女の支配下にある「物」として考え、扱おうとしていた。このようなゲレス夫人に対してどのように対応すべきか、フリーダの気持ちは複雑であった。結局、この「厄介な立場」の解決方法は、彼女が「物」としてゲレス夫人の言いなりになるか、あるいは「人間」としてゲレス夫人と別れるしかなかった。これが彼女が直面した新たな「厄介な立場2」であった。

「厄介な立場3」

実は、フリーダはもう一つのもっと「厄介な立場」(「厄介な立場3」)に巻き込まれていた。彼女はゲレス夫人と違って、「美意識」があるかないか、鋭いかそうでないかという尺度で他者を測定しなかったから、オーエンに対しても初めて会った時からゲレス夫人と違った印象を持っていた。確かにゲレス夫人が指摘しているように、オーエンは「間抜け」(Ⅰ)で「臆病者」で、「美意識」が完全に欠落しているかも知れなかった。しかし、フリーダの印象としては、彼の方が「頭が切れて鼻持ちならないよりか余っ程好ましく、ずっと素晴らしいことだ」と思われた。

さらに、オーエンはフリーダが「家族並みにおさまって彼の母の苦情の聞き役にまわっている」(Ⅱ)のを、「彼に敵対して母親の肩を持っている」とは見ずに、「かわいそうなママの

面倒を見て下さってほんとに有り難う」と感謝したり、「彼の母親がだましたり、すかしたりして」(IV)、「彼に押しつけようとした女性」と勘ぐられても仕方がないのに、そんなことを「きれいさっぱり忘れ」、「彼と母親の関係をこんぐらかせるためだけでなく、それを解きほぐすべく力を貸してくれている」と直観的に受け取っているようであった。

「彼にはこれといった機知も如才なさも閃きもなかった」(IV)が、彼女は「彼と一緒に居ると、彼が努めてそうしようとしているのではないのに、なんら抑えたところもなく」、「気まずさが少しも生じなかった」。そして、「やさしく彼女を認めて、まるで彼女が気に入ったとでも言うように」、「彼女が今ここにいることを彼は目に見えて喜んでいる」ようでもあった。そんなある日、彼の「寸分隙なく着こなしてまばゆいばかりに輝いている姿」(XIII)が「まるで別人の如しとまでいかないとしても」、「ぐっといかす男」に見えるようになった。

このようにして、フリーダはゲレス夫人の「仲介者」として、しばしばオーエンに会って、彼の人柄を知るに及んで、彼に対する次第に深まる好意（さらに、それ以上の気持ち）を抱くようになる自分に気が付いた。

その上、同じような気持ちの変化がオーエンにも起きていることを、彼女は察知した。オーエンによれば、ポイントンの「収集品」の帰属について、彼が「法的手段」になかなか訴えないので、モナは「愚図愚図していてもなんの役にも立たない」(XIV)と非難し、彼に「いや気」をさしているようであった。また、彼は彼でフリーダに「あなたをよく知れば知るほど」、「もっと早くあなたを知ればよかった」と思ったとか、「僕が愛している唯一の人が誰であるか察しがつく筈です」と言ったりした。

この変化をゲレス夫人に見破られることをフリーダは極端に恐れた。と言うのは、すでに述べたように、ゲレス夫人はポイントンの「収集品」の帰属をめぐる争いのもっとも望ましい解決方法として、オーエンをモナではなく、フリーダと結婚させることを考えていた（「厄介な立場2」）からである。オーエンとフリーダの気持ちの変化を知ったなら、ゲレス夫人はいかなる手段を講じても二人を結婚させるであろう。従って、(1) 結果としてはあれ、それはフリーダにとって「人間」ではなく「物」として扱われ、ゲレス夫人の言いなりになることと同じになる。そのようなことを彼女はしたくなかった。さらに、(2) フリーダ自身がポイントンの「収集品」を欲しさに、ゲレス夫人と共謀してオーエンをモナから横取りしたと受け取られ兼ねなかった。そのような「腹黒い女」(XVI)に彼女はなりたくなかったし、考えられたくもなかった。そうでなくても、「お屋敷持ちの他人様に、蛭のように吸いついて

いる」(VI) ことに、彼女自身も気になっていたし、彼女の真意を勘ぐる噂も聞こえていたからである。これがフリーダの「厄介な立場3」であった。

「厄介な立場4」

しかし、オーエンがフリーダを愛し、モナがオーエンを愛さなくなったのであるなら、事情は変わって来る、とフリーダは考えた。同時に、彼女は当然ながら疑念も持った。モナが彼を愛さなくなったことを、彼がモナを愛さなくなった理由にしているが、本当にモナは彼を愛さなくなったのだろうか、と。さらに、彼のような弱気な男は強気な母親と婚約者の熾烈な神経戦に耐えられなくなり、どうでもよくなって（そのようなことを、彼はすでにフリーダに話していた）、より容易な（と、彼に思われる）選択をして、この問題に早くけりをつけたくなくなったのではないか、と。もしそれが彼の本音であるとするならば、フリーダはどうすべきか。

そんなある日、「仲介者」として、フリーダがオーエンと交渉していた時、彼は結婚の申し込みをした。「ヴェッチさん？ 僕と結婚して欲しいんです」(XVI) と。それに答えて、あるいは釣られて、彼女も思わず秘めていた愛を告白した。「慕っていました、慕っていました、ずっと慕ってたんです！」と。しかし、彼女は彼にモナとの関係を聞きただすことを忘れなかった。

「ともかく、しっかりと確かめなさいといけません。あの人はあなたを愛しているに違いありません — どうしてそうでない筈がありませんか？ わたしだったらあなたを諦めなんかしないわ！... 大切なことは信義を守ることです... 男がそうしないなんて、それは残酷ですわ... わたくしはそんなことにとても加担出来ませんわ、お分かりでしょう。これがわたしの立場です」(XVI)

本当に事情が変わったのか。それをフリーダはしっかりと確認しなければならないと思った。これが新たな「厄介な立場4」であった。

ところが、このことが事前にゲレス夫人に漏れてしまった。ひょんなことからモナの母ブリグストック夫人 (Mrs. Brigstock) がゲレス夫人に知らせたからである。ゲレス夫人はフリーダとオーエンの結婚を確信し、リックスへ運んだ「収集品」の「一切合財」(XVII) を直ちにポイントンへ返還した。結婚することになった（と、彼女が賭けた）オーエンとフリーダに「収集品」を譲るためであった。ゲレス夫人に会ってこの措置を聞いた時、フリーダは唾

然とした。「何故お待ちにならなかったのですか？」(XVIII)と、心の内で詰問した。

フリーダに追い返されたオーエンは、そのまま戻って来なかった。そして、間もなく彼とモナが結婚したことが、新聞に「発表記事として掲載された」(XXI)。ゲレス夫人は「収集品」を「わたしが送ったのはあなたのためだったのに、結局彼女を呼び戻してしまったんです」(XX)と解釈した。そして、「収集品」がポイントンに返還されたことで、フリーダなら「絶対にやらないこと」をモナはやって、オーエンが「まだ向きを変えないうちに」結婚したのだ、と。確かなことは、モナはオーエンを愛し、オーエンもモナを愛していたことである。

ともあれ、思いがけない形で、ポイントンの「収集品」はゲレス夫人の手を離れ、オーエンとモナの手に渡された。関係者の予想と違った形で、「厄介な立場1」、「厄介な立場2」、「厄介な立場3」、「厄介な立場4」が一挙に解決し、ポイントンの「収集品」をめぐる激しい争いは、ひとまず終息した。

3 「仲介者」の「倫理的誠実さ」

フリーダの「厄介な立場」について、これまで縷々述べてきた。彼女の「厄介な立場」に一貫して認められる彼女の姿勢は、他者に対する気遣い、配慮を忘れない、「仲介者」としての「倫理的誠実さ」である。この「倫理的誠実さ」が「厄介な立場」をいっそう「厄介なもの」にしていた。そして、それが他ならぬ彼女の「厄介な立場」が意味するところのものであった。

繰り返して整理するならば、フリーダはオーエン（そして、モナ）に法的手段を講じさせて、ゲレス夫人にすべての「収集品」を放棄させることに堪えられなかったし、ゲレス夫人にすべての「収集品」を違法に独占させて置くこともできなかった（「厄介な立場1」）。また、争いの解決のために、フリーダがモナに代わってオーエンの花嫁候補にされることは、ゲレス夫人によってフリーダと婚約者モナの二人が「人間」扱いにされず、弄ばれることであり、承服し兼ねた（「厄介な立場2」）。さらに、フリーダはオーエンと互いに好意をもっていながらも、オーエンと結婚させられ、モナを排除する口実にされたくなかったのも、ゲレス夫人に知らせることはできなかった（「厄介な立場3」）。そして、フリーダはオーエンに結婚を申し込まれた時、争いの安易な解決のために、婚約者と母親の板挟みになった弱気な男が、婚約者との約束を一方的に破棄しようとしているのではないかと、疑わざるをえなかった（「厄

介な立場4])。

読者にとって、これらの「立場」はいずれも明らかであり、またそれぞれの「立場」におけるフリーダの気持ちも理解できると、筆者は考える。しかし、批評家（とりわけ、フリーダを中心人物兼語り手として信用できないとするグループ）にとっては必ずしもそうではない。従って、例えばロッジはフリーダを中心人物兼語り手として信用できないとするグループの批評家とその読み方について、手厳しく批判をしている。彼らは「いくつもの誇張した言い方をして、テキストによる裏付けのまったくない仮定や推定をしているのである」⁷と。

しかし、このように彼らに対して批判的であるにもかかわらず、ロッジ自身も「この物語の核心にあるものは、フリーダの性格と行動の曖昧さである」⁸とか、「選び出した引用文によって、どのような答えももっともらしく見せることができ、それでいて再びテキストに戻った時、ほとんどすべての台詞や行動が二重の解釈を可能にすることを発見する」⁹と言ったりする。

ロッジの読み方の骨子を、彼の言葉を借りて整理するならば、¹⁰ (1) フリーダの性格と行動の曖昧さは、本物の葛藤から出て来たものか、神経症的な自己矛盾から出て来たものか。(2) 彼女の「秘密」(オーエンに対する愛)を守ろうとする彼女の願望は、合理的で立派なものか(彼がモナと婚約しているとして)、それとも妄想的な、よこしまなものか(彼はフリーダを愛し、モナに幻滅していると、フリーダが考えるとして)。(3) オーエンを彼女自身に結び付け、モナから引き離す、いくつかの機会のどれをも捕らえることを、彼女が拒否しているのは、高い倫理的原則と無私無欲を示すものか、倫理的利己主義と性的神経症を示すものか。(4) 何らかの効果を持つには余りにも遅すぎるようになってから、彼女が行動するのは、彼女の混乱した、非論理的な心に特有なものなのか。これらの疑問に対して、読者はテキストを注意深く読むと、明確な答えを見つけることができず、これらのいずれを選択すべきか迷うのである。

これらの読み方は、ロッジ自身の読み方であるだけでなく、フリーダを中心人物兼語り手として信用できないとするグループの批評家のそれをも紹介している。本稿では「厄介な立場」を再説して反論することは省略するが、それらの読み方の特徴についてだけは指摘しておきたい。

このような読み方を可能にしているのは、恐らく小説（とりわけ、リアリスティックな小説）における中心人物、あるいは中心人物兼語り手において、リアリテ（つまり、生き生き

した人物像)と、このような「倫理的誠実さ」は両立しないという先入観念が、読み手側にあるためではないか。そこで、フリーダを中心人物兼語り手として信用できないとするグループの批評家たちは、彼女のリアリテの承認と引き換えに、彼女の「倫理的誠実さ」を疑わざるをえない。その結果、「倫理的誠実さ」を「性格と行動の曖昧さ」、「倫理的利己主義と性的神経症」などに置き換えるのである。

あるいは、それらの批評家たちはフリーダが立たされた「厄介な立場」を軽視、あるいは無視する余り、そのような「立場」に立たされた人物が、彼女ならずども、いささかでも「倫理的誠実さ」を持っているならば、彼女のような言動を取りたくなるのが自然であるし、取ったところで「曖昧」でも、「利己主義」でも、「神経症」でも決してないことを、読み取ることができないためではないか。ともあれ、それらが彼らの読み方の特徴である。

いずれにせよ、「この物語の核心にあるもの」は、どこまでもフリーダが「仲介者」として、一貫して持っていたし、持とうと努めていた「倫理的誠実さ」に他ならない。この小説の世界はフリーダの「倫理的誠実さ」を前提として成立し、それが認められなければ成立しない世界なのである。

しかし、そのことは彼女が言動においてためらったり、迷ったり、困惑したり、動揺したり、疑ったりしたことは決してなかった、と言うことではない。それどころか、意のままに動かない現実の中にあって、感受性と想像力の豊かな若い女が、「倫理的誠実さ」を持続けようとする程、彼女は意識的に、あるいは無意識的にそうでなければならないことがあったし、あっても不思議ではなかった。実は、そこに「倫理的誠実さ」を持ちながらも、一人の感受性と想像力の豊かな若い女としての、フリーダのリアリテがあったのであり、そのことをこのテキストは丹念に、しかも生き生きと示していた。そのことは、「性格と行動の曖昧さ」とか、「倫理的利己主義と性的神経症」とかとは別のものなのである。

フリーダを中心人物兼語り手として信用できるとするグループの批評家の一人、ポーラ・マランツ・コーエン (Paula Marantz Cohen) はフリーダの言動について次のように指摘する。"

「彼女は倫理的誠実さを維持し、自由であるために、回避、沈黙、逃避の戦術を選ぶ。... 彼女はある時点では警告や説明なしに逃亡し、ウェスト・ケンジントンの父の家の醜い美術品の中に身を隠す。... 〈聞くことをせず〉〈行為も行わないままにしておく〉という断固たる決意を持って、彼女は〈ブランク〉— 彼女に利用できる因習的な忠誠 — の中に倫理的な場所を彼女自身のために作ることに成功する。」(113)。

コーエンはフリーダのこのような「断固たる決意」を読み取ることが、彼女の言動の理解には避けられないことであると力説する。フリーダの「立場」を「厄介な」ものにしていても、このような彼女の「断固たる決意」であったことはすでに述べた。ここでも筆者が強調したいのは、この「断固たる決意」も、どこまでも彼女が立たされた「厄介な立場」という文脈の中においてそうであったのであって、それから離れてはそうではなくなるという点である。

さらに、コーエンはロッジのような「迷い」を抱く批評家たちに対して、「これらの批評家は気味悪い程ゲレス夫人に似ている」(113)と興味深い指摘をする。確かに、最終場面の直前に至るまで、ゲレス夫人はフリーダの「倫理的誠実さ」を維持しようとする「断固たる決意」を承認せず、それとは無縁な考え方を奉じ、生き方を選んでいたのである。そのように見てくると、フリーダを中心人物兼語り手として信用するグループと、そうでないグループの違いは、奇妙なことにフリーダとゲレス夫人の違いに類似してくる。

コーエンはさらに耳の痛い批評をする。ジェームズは小説家であるだけでなく、批評家でもあったから、ゲレス夫人を描くことによって、同時代（さらに、それ以降の）批評家・読者の内なる〈ゲレス夫人〉を暴露していたのである、と¹²

4 美術「品」と「美術」品

ポイントンの「収集品」は、ゲレス夫人の手を離れ、オーエンとモナの手に渡された。関係者の予想と違った形であったが、ポイントンの「収集品」をめぐる激しい争いは、一挙に解決したかに見えた。そして、ポイントン邸とその「収集品」が焼失する最終場面を迎える。

ポイントンに「収集品」が返還され、モナと結婚したオーエンは、その「収集品」の中からフリーダがもっとも好きなものを彼女に贈りたいと伝えて来た。彼女はそれを受け取るためにポイントンへ行き、ポイントンの駅頭で折からの強風の中で屋敷が炎上し、手の施しようがないことを、駅長から知らされる。気が動転した彼女は、そのままそこから次の列車で引き返すことにした。この場面で小説は終わる。

この最終場面は、たしかに「劇的効果がある」。そして、この場面についても、いくつかの読み方があり、それらをロッジやブラックコールが簡潔に紹介している¹³。そして、この最終

場面の読み方にも、大枠として二つのグループがあるように、筆者には思われる。一つはポイントン邸とその「収集品」の焼失を、「仲介者」としてのフリーダの失敗と見るグループと、そうでないと見るグループである。

前者のグループの一人、カレン・カストン (Carren Kaston)は次のように解釈する。⁴

「その屋敷は、フリーダが数週間待った後に、オーエンから与えられた贈り物を受け取りに行ったその日の朝、炎上する。ポイントンの品物が、フリーダによってモナの無関心な手に委ねられたことに対する復讐のために、突然意識を取り戻した。その不気味な感じが非難を強く表している。」(81)

あるいは、エドワード・ワゲンクネヒト (Edward Wagenknecht) は次のように分析する。⁵

『ポイントン』の最後の火災はメロドラマ的であると批判されて来たが、雰囲気としては実に見事に描かれている。収集品に感情と意志があるという説明が、もしどこかにあるとするならば、それはこの場面である。合理的レベルよりも深いレベルで、あたかもモナの手に入るよりも、それらはむしろ死を選んだかのように思われるからである... もしオーエンがフリーダと一緒にそこに住んでいたならば、それらはきっと非常に違った種類の配慮を与えられていたにちがいない。」(146-147)

カストンも、ワゲンクネヒトも、フリーダがオーエンと結婚して、ポイントン邸にいたならば、そのような火災は起きず、「収集品」は焼失することはなかった。フリーダがそれをしなかったのは、彼女自身の姿勢（「倫理的誠実さ」）にこだわる余り、「仲介者」としては失敗したからであるという見方である。これはフリーダがゲレス夫人の言いなりになって奉仕するか（「厄介な立場2」）、オーエンの弱気と無責任と不誠実に加担するか（「厄介な立場4」）、そのいずれか、あるいは両方を彼女に求めることに他ならない。このような見方は、中心人物兼語り手としてのフリーダを信用しないグループの人々の取るそれでもあり、またコーエンの言葉を借りるならば、ゲレス夫人と同じ考えの人々でもある。

これらの人々にきわめて特徴的なことは、フリーダの「倫理的誠実さ」を無視、あるいは軽視したように、最終的場面におけるゲレス夫人の「回心」をも無視、あるいは軽視していることである。「収集品」をポイントンに返還してしまったゲレス夫人は、リックスの「隠居小屋」(Ⅱ)で、気付かないままに「回心」とも言うべき心の大変化を体験し、それをフリーダに指摘され、気が付く。

ゲレス夫人は「隠居小屋」(Ⅱ)に以前からあったわずかな収集品、彼女の言葉によれば

「丁度四点」(XXI)で、気が付かないままに「隠居小屋」(II)を、そこに「住むことを特権と心得ない女は英国にいないでしょう」(XXII)とフリーダに言わしめた程、「美しい場所」に変えてしまった。そして、その「美しい場所」は、「ポイントンの大合唱」とは違った「こんなにもやさしく、こんなにも人間らしく」「かすかに遠くから、傷心のかすかな震えを帯びて、聞こえてくる声」を聴くことのできる場所であった。

「美しいもの」(XXI)は、強奪され、所有され、蓄積された大量の「物」ではなくて、「夢見ながら捕らえられない」、「切り詰められ、断念され、放棄された」、そういう「何か」であることを、ゲレス夫人はここに至ってようやく知ることができた。つまり、今や「一番心得た人ということになった」フリーダの助けを借りて(これまでの彼女の努力も、ゲレス夫人をより非人間的な人物にさせまいとする、時には無意識なそれでもあったのだが)、ゲレス夫人は「美しいもの」とは「物」ではなくて、「物でない何か」であることを知り、気が付かないままに「回心」を体験した。

コーエンは、このようなゲレス夫人とフリーダを待っていたものが、「新しい生活」¹⁶であったと、次のように説明する。

「収集品を破壊したポイントンの炎上は、自由な想像的な生活への道を塞いでいるすべての妨害を排除したという事実を意味している。彼女が駅長に『ポイントンはなくなったんですか?』と尋ねる時、彼の返事の曖昧さはわれわれがすでに当然知っていること、つまり『ほんとに何一つ救い出せていないんだから、お嬢さん、なんて言ったらいいんですかな?』をわれわれに告げているのである。言い換えれば、救い出されたものは、物それ自体としての収集品ではなくて、それらがあつた空間、フリーダとゲレス夫人が新しい生活に船出する空間なのである。」(115-116)

ポイントン邸とその「収集品」が焼失したのは、他ならぬ「それらがあつた空間」(116)を、フリーダ(そして、ゲレス夫人)に与えるためであったと、コーエンは言う。筆者なりに解釈するならば、フリーダとゲレス夫人にとって大切なのは、今や美術「品」ではなくて、「美術」品である。オーエンの「感謝のしるし」として、フリーダが受け取りに行ったのは、美術「品」ではなくて、「美術」品であった。従って、彼女が受け取りに行った時、美術「品」が「美術」品になるために、つまり「物」が「物でない何か」になるために、「収集品」は焼失した。そして、焼失したことによって、「収集品」は彼女に相応しい「感謝のしるし」に純化したのである。¹⁷

従って、「収集品」は、カストンが言うように、フリーダに復讐するために「意識を取り戻した」のでもなければ、ワゲンクネヒトの言うように「死を選んだ」のでもない。「収集品」はフリーダに相応しい「感謝のしるし」になるために、「物」から「物でない何か」に純化したのである。コーエンの言葉を借りるならば、フリーダとゲレス夫人のために「新しい生活」を始めるのに相応しい「空間」を作り出したのである。

ここに至って、フリーダを「仲介者」として失敗したと見るグループ、それに彼女を中心人物兼語り手として信用できないグループの批評家たちは、ゲレス夫人にも追い越されてしまった。

おわりに

ポイントンの「収集品」が「遺産」に変わったとたんに「財産」と「美術品」の二つに分裂し、オーエンとモナが「財産」として、ゲレス夫人が「美術品」として、その所有権を主張した。この「相続争い」の「仲介者」にフリーダはされ、「厄介な立場」に立たされた。

しかし、「収集品」は、焼失したことによって「財産」でもなく、「美術品」でもなくなった。しかし、オーエンとモナは、そのことによって少しも困ることはなかった。オーエンとモナは、それをゲレス夫人に渡すことなく、結婚をすることができた。であれば、二人にとってそのような「財産」はもはや用がなくなったからである。他方、ゲレス夫人も、そのような美術「品」をもはや必要としなくなった。彼女にとって、大切なものは美術「品」ではなく、「美術」品であったからである。

このようにして、フリーダは「収集品」をゲレス夫人からオーエンに返還させ、彼とモナを結婚させ、ゲレス夫人が「隠居小屋」(Ⅱ)で安心して住めるようにし、さらに「収集品」を「物」から「物でない何か」に純化して、ゲレス家の「相続争い」の「仲介者」として、彼女自身の「厄介な立場」を解決すると共に、当初の予想よりもより円満に、この争いに終止符を打つことができた。¹⁸

そうであってみれば、フリーダは豊かな感受性と想像力、それに「倫理的誠実さ」を持つた若い女であるばかりでなく、あるいはあるが故に、この「相続争い」の世界において、存在し得るもっとも見事な「仲介者」になった。そして、いかに彼女がそうであったか、あるいはなかったかを記録したのが、この小説である。これが筆者の「もう一つの読み方」のささ

やかな結論である。

それにしても、かくまで「腹黒い女」(XVI)になるまいと覚悟し、「沈黙によって修道女の誓いのように厳粛にわが身を縛った」(XX)若い女は、一体何者なのか。そして、どこから来て、どこへ行くのか。⁹『ポイントンの収集品』は、あらためてこのことを読者に自問させながら終わる。

注

1 Henry James, *The Spoils of Poynton* (1897; Oxford: Oxford U P, 1982)を使用。これはthe New York Editionに依っている。邦訳は、『ポイントンの蒐集品』大西昭夫・多田敏男訳（『ヘンリー・ジェームズ作品集2』1-256、昭和59年、国書刊行会）から借用（一部変更した箇所もある）。以下、作品への言及は巻番号を添えて示す。同一パラグラフ内で、同一巻番号が続く場合、最初の巻番号のみを記す。

2 Oscar Cargill, "The Spoils of Poynton," *The Novels of Henry James* (New York: Macmillan, 1961), pp. 218-243.

3 David Lodge, "Introduction," *The Spoils of Poynton* (1897; New York: Penguin Books, 1987), pp. 1-18.

4 Jean Frantz Blackall, "The Experimental Period," *A Companion to Henry James Studies*, ed. Daniel Mark Fogel (Westport, CT: Greenwood Press, 1993), pp. 147-178.

5 Lodge, pp. 5-7.

6 Blackall, p. 162.

7 Lodge, p. 7.

8 *ibid.*, p. 12.

9 *ibid.*

10 *ibid.*

11 Paula Marantz Cohen, "Feats of Heroism in The Spoils of Poynton," *The Henry James Review* 3 (1981-82).

12 *ibid.*, 114.

13 Blackall, p. 162.

14 Carren Kaston, *Imagination and Desire in the Novels of Henry James* (Brunswick, N.J.: Rutgers U P, 1984), p. 81.

15 Edward Wagenknecht, *The Novels of Henry James* (New York: Frederick Ungar, 1983), pp. 146-147.

16 Cohen, 116.

17 「収集品」が焼失した日、オーエンとモナは留守で、返還された「収集品」はポイントン邸にあり、不注意な召使たち（ゲレス夫人の召使ではない）に管理が委ねられていた。そして、「この凄い風」が吹き荒れていた（それに、ポイントン邸の「煙突が腐っていた」のかもしれないが）。そのように「収集品」が焼失するのに又と無い日を選んで、焼失を予知し、その啓示を受けるためであるかのように、フリーダはポイントンへ「感謝のしるし」を受け取りに行った。

そのことについて、*Henry James's Psychology of Experience :Innocence, Responsibility, and Renunciation in the Fiction of Henry James* (The Hague: Mouton, 1975), p.131において、Granville H. Jonesは次のように解釈する。

「フリーダ・ヴェッチが誠実に倫理的であろうと努力するが、馬鹿か狂人のように見られ、すべての人々を困惑させ、笑い者にされる世界、嘘をつき、悪徳に誘惑され、不幸になり、苦しみ、そして卑下しながら長期の贖罪に身を委ねなければならない世界、この世界にヘンリー・ジェームズが加えた懲罰が、それ（「収集品」の焼失）なのである。」

あるいは、

「フリーダ・ヴェッチがこの世界でいかなる報償をも得なかったとするならば、彼女に相応しい良きものが、（この世界に）本当に存在しないということを、多分ジェームズは仄めかしているのであろう。」

18 *The Spoils of Poynton*を、同時代の社会的・政治的状況に関連させて論じている批評家もいる。例えば、*The Ethnography of Manners: Hawthorne, James, Wharton* (Cambridge: Cambridge U P, 1995), pp. 155-158において、Nancy Bentleyは次のように指摘する。

「『ポイントンの収集品』は富裕な中産階級の創設の神話と叙事詩的な戦いを記録した書物である。」「プロットに対するこのような結末は、俗物たちの歴史的な勝利を予言しているように受け取られる。それは法律の公権力、つまりこの物語では... 富裕な俗物たちが手にしている権力なのだが、それに対して趣味と習俗が相対的に弱体であることを強調しているように思われる。しかし、習俗と文化の力は本当にそんなに傷つきやすいものであろうか。」

また、*The Phenomenology of Henry James* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1983), pp. 190-203
において、Paul B. Armstrongは次のように言う。

「『ポイントンの収集品』はきわめて政治的な小説である。」「ほぼ同時代に社会構造を分析
したマルクスと同じように、ジェームズは人間活動の生産物 — それを通してわれわれがわ
れわれ自身を表現し、対象化する事物 — が、われわれがそれらを支配する以上にわれわれ
を支配している状況を描いている。」

19 フリーダはどこから来て、どこへ行くのかについて、John AuchardとMillicent Bellの読み
方を紹介しておく。

Silence in Henry James: The Heritage of Symbolism and Decadence (University Park: Pennsylvania
State U P, 1986), pp. 82-84 において、Auchardは次のように言う。

「結局フリーダはリックスの雰囲気を選ぶ。」「ポイントンは不毛か、血なまぐさい破壊しか
生まない。彼女は「精妙な破壊的な豊かさから浄化されなければならない。そこで、小説は
火による最終的な浄化へと動いて行く。」「『ポイントンの収集品』は、女主人公にもっとも妥
協的でない浄化を経験させ、一瞬の好意も、一オンスの息抜きも、一片の単純で、優しい、
人間的な思いやりも与えない。フリーダ・ヴェッチの否定的な道は残酷なものに見える。彼
女は煙の悪夢を見、両手で顔を覆って、それから七分後にロンドンへ、そして不明瞭な未来
へ逃げ帰り、恐らく容赦ない一撃を与えられ、多分より生命力のある女性となるであろう。」

そして、Auchardはフリーダが行き着く女性として、*The Wings of the Dove* (1902)の女主人
公Milly Thealeを示唆する。

これに対して、Millicent Bellは“The Disengagement from “Things”: *The Spoils of Poynton*,”
Meaning in Henry James (Cambridge: Harvard U P, 1991), pp. 216-217において、フリーダを*The
Portrait of a Lady* (1881)の女主人公 Isabel Archerに、そして*The Wings of the Dove*の中のもう一
人の女性 Kate Croyに比較する。